

ランキング向上を阻む大学人の「嫉妬」の大罪

出る杭に未来を託す環境を作り、海外ポスドクに活躍の場を

高部英明 ドイツ・ヘルムホルツ研究機構上席研究員、大阪大学名誉教授

日本の大学の世界ランキングをあげるには、教育・研究の「2016年10月28日評 判」向上が必要であり、そのための手段として大学は海外経験豊かな若手を戦略的に採用せよ、と前稿で提案した。では、彼・彼女らが能力を発揮できる環境が日本の大学に整っているのか、と聞かれると、私の知る範囲では答えは「否」である。本稿では、自分の体験を元にその点を掘り下げ、どうすべきかを考えたい。

元気な若者が日本の組織に入ると「出る杭は打たれる」を経験する。そして、日本の風土にふさわしい、おとなしい人間に矯正されていく。横並びの行動を求められ、「角を矯（た）めて牛を殺す」となりかねない。

その背景には、元気な新人への同僚からの「嫉妬」がある。「嫉妬」はカトリック教会では七つの大罪に上げられている「罪」である（右表）。小さいときから自立性を教育された個人主義の欧米では、嫉妬が組織をダメにすることはない。しかし、横並び文化の日本では「罪」という意識は薄く、「誰しも持つ感情」と受け止められる。だから嫉妬が人をダメにし組織の活力をそぐという認識がない。また、嫉妬を受ける側が外に飛び出せるほど、日本は職場が流動化していない。上記が日本の大学が抱えるもっとも大きな問題だと思う。

カトリック教会の七つの大罪

日本語	英語	ラテン語
高慢	pride	superbia
貪欲	avarice	avaritia
嫉妬	envy	invidia
憤怒	wrath	ira
色欲	lust	luxuria
暴食	gluttony	gula
怠惰	sloth	pigritia

日本の大学のお寒い体質

企業では組織の力は「利益」という数値で評価され、赤字になれば生き残りのため自己改革をせざるを得なくなる。ところが、大学には「黒字、赤字」という明確な指標がない。自己評価で律することが基本である。法人化後に盛んになった「外部評価」もお手盛りで、厳しい評価の話は聞かない。また、国立大学では「部局の自治」が大事にされ、人事を含め運営は部局という小さい単位で閉じている。この「部局の自治」が改革を阻む。



図1 1996年、始めて「高部の公式」が正しいことを実験的に確認した米国リバモア研のレーザー装置「NOVA」

私は米国留学中の研究成果を2本の論文にして1983, 85年と米国学術誌に掲載した。自信があったので、1985年掲載の論文で理論結果を「公式」として提案した。この公式が1990年頃から「高部の公式(Takabe formula)」と米国で呼ばれ始めた。後で米国の友人から聞いたが、米国三大研究所がスパコンで計算し、その結果が私の理論と全て一致。米国エネルギー省主催の機密会議でのことだそう。結果、その場で「高部の公式」という名がついた。現時点で論文の被引用は500回を越え、Googleで「Takabe formula」で検索すると598件がヒットする。

世界中がそれを受け入れ、お陰で私は有名人となり、世界中に知人が増えた。「高部の公式」が正しいことは1996年、図1のNOVA装置によりKimBudil達が検証した（彼女は現在カリフォルニア大学の研究担当副学長）。核兵器がらみの秘密研究が多いレーザー核融合研究分野で個人名は付きにくい。だから、個人名が付いた学術用語はこれだけだ。それも日本人の名前。大学の仲間が喜んでくれるかと思ったら、だんだん反発する動きが出てきた。米国からでなく、同じ部局からである。

部局の先輩が「この公式はそれ以前の成果も考慮し、米国人の名前も入れ、Bodner-Takabeと改めるべきだ」と公に主張し始めた。国際会議で名称変更を提案し、2002年の米国物理学会で発表し、論文にもした。

同じ部局の日本人から「高部の公式」の名称に異議が出、世界は困惑した。結局、その後はだんだん「the formula」という引用になっていった。このような事態を諫めてくれる同僚も現れず、部局内は「触らぬ神にたたりなし」の雰囲気。ある友人は「男の嫉妬ですよ。日本社会では良くある」と慰めてくれたが、「嫉妬は大罪の一つである」と罪を問う動きはなかった。

「罪を裁かない大学の部局」。どうも、部局長含め上司、同僚は大なり小なり嫉妬の塊。私は敢えて争わなかった。彼が名称改訂を言い出した頃は、既に核融合研究を離れ大型レーザーを宇宙物理研究に利用する提案を行い、推進していたからだ。さらに「過去の栄光を追うなかれ」と自戒していたこともある。私が反発しても部局内が泥沼になるだけで、誰も味方はしてくれなかっただろう。

以上、極めて明快な実例を書いた。左様に日本の大学は「出る杭を叩く。叩いている者がいても誰も止めない」。正義を常に議論する土壌が日本の大学には欠けている。

この様相はまさに、ガンジーが1925年に定義した「七つの社会的罪」= 右表 = の二つ、「人格なき学識」、「人間性なき科学」ではないか。これが私の知る「世界大学ランキング上位を目指す」日本の大学の実態である。

七つの社会的罪 ガンジー(1925年)

日本語	英語
理念なき政治	Politics without Principle
労働なき富	Wealth without Work
良心なき快楽	Pleasure without Conscience
人格なき学識	Knowledge without Character
道徳なき商業	Commerce without Morality
人間性なき科学	Science without Humanity
献身なき信仰	Worship without Sacrifice

どう変えるべきか

日本の大学がそんなでは淋しい限りだが、日本にも私が高く評価する学術分野がある。天文・宇宙物理の分野である。そう、ノーベル賞の大隅良典さんが受賞会見で訴えた「社会がゆとりを持って基礎科学を見守って」という基礎科学の最たる分野が天文学。この分野は若手が元気で、有能な研究者をコミュニティが盛り上げる風土がある。

なぜ、天文分野は若者が学会等で元気が良いのか。理由は「天文学はすぐには社会に役立たない。霞を食って生きる学問だからだ」と私なりに結論している。基礎科学が生き残るためには、常にその分野に優秀な若者が来てくれる必要がある。だから、年配者は分野の魅力を広く伝え、早く世代交代を行い、若手が活躍しやすい仕組みを作り上げてきた、と理解している。しかし、宇宙物理の友人にこう話したら「高部さんは良いとこしか見てないよ。どろどろした話もあるんだよ」と言われた。

しかし、私の原点、核融合研究分野と比べると、やはり違いが大きい。核融合では「社会の役に立つ」ということに胡座（あぐら）をかいている研究者を多く見かける。そして、年配者が威張る、生意気な若者は押さえつけられる。下手に「役に立つ」から進歩が遅くとも生き残れる。だから、ますます学術がタコ壺化しレベルも低くなる。

科学に疎い政治家や官僚が「科学技術を経済力強化に」などと、「結果」と「目的」をはき違えた予算化を主張し、大学人がそれになびくことが悲しい。「貪欲」も七つの大罪のうちの一つである。日本は1991年から税収が伸びず、1000兆円を越える財政赤字を抱える。科学技術予算も借金の上に成り立っている。どうも学者まで「貧すれば鈍する」になりつつあると、心配している（ドイツの研究予算は大変潤沢です）。

日本の大学が世界ランキングを上げようとするなら、生意気でも良いから欧米と渡り合える優秀な若者を教員に採用すべきである。その際に、若手が活躍できる環境を作るのが年配の教員の役割だ。嫉妬したくなるほど優秀な若者がいたら部局の看板にする。そして、そんな若者がいることを学会で自慢し、広報していく。日本の大学の体質に不満があるなら、オープンに議論し、若者が活躍できる大学にしていく。教授になったら「学生や若手の能力を目利きする」能力を競って欲しい。名伯楽なくして大学の発展は期待できない。

大学人へのお願い

明治維新を思い起こしてほしい。幕府の老中達が黒船の要求への対応策を見いだせず、右往左往している間に時代は過ぎ去り、維新を断行したのは若い志士たちだった。同じように、大学を進化させていくのは優秀な若者たちである。

日本の大学人をお願いしたい。大学ランキング向上を目指すこの機会に、欧米で忌み嫌われる高慢、貪欲、嫉妬、憤怒、色欲、怠惰の大罪をなくしてほしい。大学には理想があることを社会に示して欲しい。そして、ガンジーの「七つの社会的罪」のない崇高な場を実現し、大学を改革して欲しい。特に、学長や理事、部局長の皆さんをお願いしたい。

論

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.